

芥川龍之介著「私と創作」―芥川龍之介全集 第二巻―岩波書店 1995年12月8日刊を読む

私と創作

1. 材料は、従来よく古いものからとつた。そのために、僕を、としよりの骨董いぢりのやうに、いかものばかり探して歩く人間だと思つてゐる人がある。が、さうではない。僕は、子供の時にうけた旧弊な教育のおかげで、昔からあまり、現代に關係のない本をよんでゐた。今でも、読んでゐる。材料はその中から^め目つかるので何も材料をさがす為にはばかりよむのではない。(勿論さがす為によんでも、悪いとは思はないが。)
2. が、材料はあつても、自分がその材料の中へはいれなければ、――材料と自分の心もちとが、ぴったり一つにならなければ、小説は書けない。無理に書けば、支離滅裂なものが出来上る、僕はあせつて何度もさう云ふ莫迦な目に遇つた。唯、弱るのは、その一つになる時が、何時来るかわからない事である。材料を手に入れて、すぐさうなる事もあるし、材料を持つてゐる事を^{ほとん}殆ど忘れた時分になつて、やつとさうなる事もある。飯を食つてゐる時でも、本を読んでゐる時でも、後架にゐる時でもかまはない。その時は、眼の先が明くなつたやうな心もちがする。
3. そこで、書くものが出来ると、早速書きはじめる。時間は午前中と夜の六時頃から十二時頃までが、一番働き易い。夜の十二時すぎになると、その時は夢中になつて書いてゐても、あくる日見て、いや気のさす事がよくある。日で云ふと風の吹く日がいけない。季節は、十月から四月頃が、いゝやうだ。場所は、静で、或程度まで明るさへあれば、何処でも^{さしつか}差支へない。
4. 書き出すとよく、癩癩が起る。尤もこれは、起るやうな周囲の中に置かれてあるから、起るので、さもなかつたら、起らないのにちがひない。少くとも余程穩な心もちでゐられさうに思はれる。が、従来どうもさう行かなかつたから、ものを書く時は、よく家のものをどなりつけた。
5. 癩癩を起さない限り、書く事はずんずん書ける。時によると、字を書いてゐる暇が面倒臭い事もある。もし^{つか}問へれば、手あたり次第、机の上の本をあけて見る。さうすると、大抵二頁か三頁よむ中に、書けるやうになつてくる。本は何でも差支へない。子供の時から字引きをよむ癖があるから、デイクソンの熟語辞書などをよむ事もある。尤も、書くと云つても、消す事も、書く中へ入れて云ふのだから書き上げた枚数と時間との割合から云へば、寧ろ遅筆の方にはいるらし

い、消す方は別して未練なく消す。それでもまだ消し足りなささうな気がするが。

6. 書いてある時の心もちを云ふと、^{こしら}拵へてみると云ふ気より、育ててみると云ふ気がする。人間でも事件でも、その本来の動き方はたった一つしかない。その一つしかないものをそれからそれへと見つけながら書いて行くと云ふ気がする。一つそれを見つければ損ふと、もうそれより先へはすゝまれない。すゝめば、必ず無理が出来る。だから、始終注意を張り詰めておかなければならない。はりつめておいても、僕などは、まだ見のがしてしまふ。それが兎に角苦しい。

7. それから文章にも、^{かなり}可成くだらなく神経をなやませる。これは僕には時と場合でとても使へない語があつたり、句の調子が妙に気になつたりするのだから、仕方がない。たとへば柳^{やなぎはら}原と云ふ町の名前でも、一面にそこいらが緑になるやうな気がして、その緑に折合ふやうな外の色の語がない以上、どうしても使ふ気にはなれない。これだけは、^た実際崇られたと云ふ気がしてゐる。

8. 書いてしまふと、何時でもへとへとになる。書くだけはもう当分御免を蒙らうと云ふ気になる。が、一週間と何も書かずにみると、やつぱりさびしくつて、いけない。何かしら書いて見たくなる。さうして又、前の順序をくり返す。この調子では、これにも死ぬ迄崇られさうである。

9. 書いたものは、**活字でよむと、多くの場合いやになる**。今までは何時でも、書き方より、こんな物の見方では救はれないと云ふ気が、痛切にして、云はゞ書いてある時より、ふだんの生活そのものに、愛憎がつかしたくなるのである。それから先は、二度目に見て、見直す場合と、愈悪くなる場合とあるが、これはその時々によつてわからない。

P209 ~ 211

<コメント>

作家、芥川龍之介の小説家としての日常がよくわかる。文章を書く上で参考になる指摘がたくさんあり、有難い。

2020年10月13日(火)